

又、一切の往生人等に白さく、
今更に行者の為に、「の譬喩を説きて、
信心を守護して、以て外邪異見の難を防がん。
何者か是なるや。

【先標喩法】

■有人向西

譬へば、人有つて西に向ひてを行かんと欲するに、
百千の里ならん。

■水火二河

忽然として中路に見れば二河有り。
一には是火の河、南に在り、
二には是水の河、北に在り。
二河各闊さ百歩、各深くして底無し。南北辺無し。

■中間白道

正しく水火の中間に一の白道有り。
闊さ四・五寸ばかりなるべし。

此の道東の岸より西の岸に至るに、亦長さ百歩。

■水火濕焼

其の水の波浪交はり過ぎて道を湿すに、
其の火炎亦来つて道を焼く。
水火相交つて、常にして休息無けん。

次に喩へを合せば、

●東岸西岸

『東の岸』と言うは、
即ち此の娑婆の火宅に喩うるなり。
『西の岸』と言うは、
即ち極楽の宝国に喩うるなり。

●群賊悪獸

『群賊・悪獸許り親しむ』と言うは、
即ち衆生の六根・六識・六塵・五陰・四大に喩うるなり。
(自障に約す)

●無入空迴

『無入空迴の沢』と言うは、
即ち常に惡友に隨いて、
眞の善知識に値わざるに喩うるなり。

●水火二河

『水火二河』と言うは、
即ち衆生の貪愛は水のごとし、
瞋憎は火のごとしと喩うるなり。

●中間白道

『中間の白道四・五寸』と言うは、
即ち衆生の貪瞋煩惱の中に、
能く清淨の願往生の心を生ぜしむるに喩うるなり。
乃し貪瞋強きに由るが故に、
即ち『水火』のごとしと喩ふ。
善心微なるが故に、『白道』のごとしと喩ふ。

【二卷鈔】

二河の中について、
『一の譬喩を説きて信心を守護して、もつて外邪・
異見の難を防がん』と。

『この道、東の岸より西の岸に至るまで、また長さ百
歩なり』文
『百歩』とは、人壽百歳に譬ふるなり。

『群賊・悪獸』とは、

『群賊』とは、別解・別行・異見・異執・惡見・邪
心・定散・自力の心なり。

『惡獸』とは、六根・六識・六塵・五陰・四大なり。
『つねに惡友に隨ふ』といふは

『惡友』とは、善友に對す、雜毒虛仮の人なり。
『無入空迴の沢』と言うは、惡友なり。眞の善知識に
値はざるなり

『眞』の言は仮に對し偽に對す。

『善知識』とは、惡知識に對するなり。
眞の善知識 正の善知識
實の善知識 是の善知識

善の善知識 善性人なり
惡の善知識 仮の善知識

偽の善知識 邪の善知識
虚の善知識 非の善知識

惡の善知識 惡性人なり

『白道四・五寸』と言うは、

『白道』とは、

『白』の言は黒に對す、
『道』の言は路に對す、

『白』とは、
すなはちこれ六度万行、定散なり。
これすなはち自力小善の路なり。

『黒』とは、
すなはちこれ六趣・四生・二十五有・十二類生の黒
惡道なり。

『四・五寸』とは、

『四』の言は四大、毒蛇に喩ふるなり。
『五』の言は五陰、惡獸に喩ふるなり。

『能生清淨願往生心』と言うは、
無上の信心・金剛の真心を發起するなり、
これは如来回向の信樂なり。

【正約趣向】

■空眩遭難

○無人空眩

此の人既に空眩の廻かなる処に至るに、更に人物無し。

○群賊悪獸

多く群賊・悪獸有り、此の人の単独なるを見て、競ひ来つて此の人を殺せんと欲す。

■怖死向西…定死惶怖

○怖死向西

死を怖れて、直に走つて西に向かうに、

(未見白道位)

○念言惶怖

忽然として此の大河を見て、即ち自ら念言すらく。

(見一白道位)

「此の河は南北辺畔を見ず、中間に一の白道を見る、極めて是狭小なり。

二の岸相去ること近しと雖も、何に由つてか行くべき。

今日定んで死せんこと疑わず。

●水火湿焼

又『水波常に道を湿す』とは、即ち愛・心・常に起つて、能く善心を染汚するに喩うるなり。

又『火炎常に道を焼く』とは、即ち瞋嫌の心能く功德の法財を焼くに喩うるなり。

【三心料簡事 醍醐本 法然上人伝記】

白道の事

雑行の中の願往生の心は、白道なれども貪瞋水火の為に損なわれる。何を以て知ることを得る、

「諸の行業を回して直ちに西方に向かう」と云也、諸行往生の願生の心と聞こえたり。次に、専修正行の願生の心をば、願力の道と名づく。

何を以て知ることを得る

「仰いで釈迦の発遣指南を蒙り、西方、又弥陀悲心招喚による、今二尊の意に信順して、水火二河を顧みず、念々に遺ることなく、彼の願力の道に乗ず、捨命已後、彼の国に生を得」文已下文、是なり

正行の者は、願力の道に乗ずる故に、念、貪瞋水火損害せず。

是れを以て、譬喩中に云く、

「西岸の上に人有りて喚んで言く、汝一心正念にして直ちに來れ、我れ能く汝を護らん、衆て水火二河の難に墮せんことを畏れざれ」

合喩の中に云く、

「西岸の上に人あつて喚ぶと言うは、即ち弥陀の願意に喩える也」

専修正行の人は、貪瞋煩惱を恐れざる也。本願の白道に乗ぜり、豈に火焰水波に損せざらんや。

【本典信巻】

まことに知んぬ、二河の譬喩のなかに

『白道四五寸』といふは、

『白道』とは、

『白』の言は黒に對するなり。

『白』はすなはちこれ選択摂取の白業、往相回向の淨業なり。

『黒』はすなはちこれ無明煩惱の黒業、二乗・人・天の雜善なり。

『道』の言は路に對せるなり。

『道』はすなはちこれ本願一実の直道、

大般涅槃、無上の大道なり。

『路』はすなはちこれ二乗・三乗、万善諸行の小路なり。

『四五寸』といふは衆生の四大五陰に喩ふるなり。

『能生清淨願心』といふは、金剛の真心を獲得するなり。本願力の回向の大信心海なるがゆゑに、破壊すべからず。これを金剛のごとしと喩ふるなり。

【序分義…定善示觀緣】

為煩惱賊害と言ふは、此凡夫障重く、妄愛迷ひ深くして、三惡の火坑闇くして人の足下に在ることをおもはず。

縁に隨ひて行を起して

進道の資糧と作さむと擬するも、

何ぞ其六賊知聞し、競ひ来りて侵し奪ふ。

今既に此の法財を失ふ、

何ぞ憂苦無きことを得むやといふことを明かす。

【本典信巻…信樂釈】

一切凡小、一切時のうちに、

貪愛の心つねによく善心を汚し、

瞋憎の心つねによく法財を焼く。

【聞書二二八】

一、人の身には眼耳鼻舌耳意の六賊ありて善心をうばふ。これは諸行のことなり。

念仏はしからず。仏智の心をうるゆゑに、貪瞋痴の煩惱をば仏の方より刹那に消したまふなり。ゆゑに「貪瞋煩惱中能生清淨願往生心」といへり。正信偈には、

「譬如日光覆雲霧雲霧之下明無闇」といへり

正しく到り回らんと欲えば、
群賊・悪獸漸漸に來り逼む。

(回)

正しく南北に避り走らんと欲すれば、
惡獸・毒虫競い來つて我に向う。

(避)

正しく西に向い道を尋ねて去かんと
欲すれば、

(去)

復恐らくは此の水火の二河に墮せん」ことを。
時に當つて惶怖すること、復言ふべからず。

■怖死向西…思念強決

○思念三死

即ち自ら思念すらく。

「我今迴らば亦死せん、

住まらば亦死せん、

去かば亦死せん。

(回)
(住)
(去)

○強決尋道

一種として死を免れざれば、

我寧く此の道を尋ねて前に向かいて去かん。

既に此の道有り。必ず可度すべし」と。

■決定直進…東西遣喚

○東遣聞声

此の念を作す時、

東の岸に忽ちに人の勸むる声を聞く。

「仁者、但決定して此の道を尋ねて行け、

必ず死の難無けん。

若し住まらば、即ち死せん」と。

四定死	回	避	住	去
	：	：	：	：
	三乘聖道	九方淨土	人天善趣	自力往生

●人行道上

『人道の上を行きて、直ちに西に向かう』と言うは、
即ち諸の行業を廻して、

(めぐらして「西方指南抄 p246」)
直に西方に向かうに喩うるなり。

●東遣直進

『東の岸に人の声勸め遣はすを聞きて、
道を尋ねて直に西に進む』と言うは、

即ち釈迦已に滅したまいて、後の人見たてまつら
ず、由教法有つて尋ぬべきに喩う。

即ち之を『声』のごとしと喩うるなり。

【二巻鈔】

『あるいは行くこと一分二分す』と言うは、
年歳時節に喩ふるなり。

『惡見人等』と言うは、
驕慢・懈怠・邪見・疑心の人なり。

【二多文意】

凡夫といふは、
無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、い
かり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひま
なくして、
臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえ
ずと、
水火二河のたとへにあらはれたる。

かかるあさましきわれら、
願力の白道を一分二分
やうやうづつあゆみゆけば、
無碍光仏のひかりの御ころに
をさめとりたまふがゆゑに、
かならず安樂淨土へいたれば、
弥陀如来とおなじく、
かの正覺の華に化生して大般涅槃のさとりを
ひらかしむるをむねとせしむべしとなり。
これを致使凡夫念即生と申すなり。
二河のたとへに、「一分二分ゆく」といふは、
一年二年すぎゆくにたとへたるなり。

【玄義分】

彼に喚び此に遣す豈に去かざるべけんや

【本典…六字釈】

是を以て、歸命は本願招喚の勅命なり

【二巻鈔】

『西の岸の上に人 having 喚ぶ』と言うは、
即ち弥陀の願意に喩うるなり。

『須臾に西の岸に到つて、善友相見て喜ぶ』
と言うは、
即ち衆生久しく生死に沈みて、眩劫より淪廻し、
迷倒して自ら纏うて、解脱に由無し。

○西岸人喚

又西の岸の上に人有つて喚ぼうて言わく、
「汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん。
衆て水火の難に墮せんことを畏れざれ」と。

■決定直進…信順尋道

此の人既に此に遭わし、彼に喚ぶを聞きて、
即ち自ら正しく身心に當て、決定して道を探ねて、
直に進みて、疑怯退心を生ぜずして、

■決定直進…外難不妨

○群賊喚迴

或いは行くこと一分二分するに、
東の岸に群賊等喚ぼうて言わく、
「仁者迴り來れ、此の道嶮惡なり、
過ぐることを得ず。必ず死せんこと疑わす。
我等衆て惡心あつて相向かうこと無し」と。

○不顧念道

此の人喚ぶ声を聞くと雖も亦迴顧す、
一心に直に進みて道を念じて行けば、

■到西慶樂

須臾に即ち西の岸に到つて、永く諸の難を離る。

善友相見えて慶樂すること

已むこと無からんが如し。

此は是喩なり。

●群賊妄説

『或いは行くこと一分二分するに、
群賊等喚び迴す』と言は、
即ち、別解・別行・惡見の人等、妄に
「(往生人が)見解もつて送いに相惑乱し、
及び自ら罪を造つて退失す」
と、説きたもうに喩うるなり。〔本典〕

別解・別行・惡見人等
妄りに見解を説きて送いに相惑乱し、
及び自ら(往生人 or 惡見人)
罪を造りて退失するに喩ふ。

〔西方指南抄 p247〕

●西岸人喚

『西の岸の上に人有つて喚ぶ』と言は、
即ち弥陀の願意に喩うるなり。

●乗彼願力

『須臾に西の岸に到つて、善友相見て喜ぶ』
と言は、即ち衆生久しく生死に沈みて、眩劫よ
り淪廻し、迷倒して自ら纏うて、解脱に由無し。
仰いで釈迦発遣して、指えて西方に向えたもうこ
とを蒙り、又弥陀の悲心招喚したもうに藉つて、
今二尊の意に信順して、水火の二河を顧みず、
一念に遺ること無く、彼の願力の道に乗じて、

●到西慶樂

捨命已後、彼の国に生るることを得て、
佛と相見て慶喜すること何ぞ極まらん
と喩うるなり。

仰いて釈迦発遣して、
指えて西方に向えたもうことを蒙り、
又弥陀の悲心招喚したもうに藉つて、
今二尊の意に信順して水火の二河を顧みず、
一念に遺ること無く、彼の願力の道に乗じて、
捨命已後、彼の国に生るることを得て、
佛と相見て慶喜すること何ぞ極まらん
と喩うるなり。

『また、西の岸の上に人ありて喚ぼうていはく、「汝
一心正念にしてただちに來れ、我能く護らん」と言
うは、

『西の岸の上に人ありて喚ぼうていはく』といふは、
阿弥陀如来の誓願なり。
『汝』の言は行者なり、
これすなはち必定の菩薩と名づく。

龍樹大士『十住毘婆沙論』には、
『即時入必定』となり。

曇鸞菩薩の『論』には
『入正定聚之数』といへり。

善導和尚は、
『希有人なり、最勝人なり、妙好人なり、好人なり、
上々人なり、真仏弟子なり』と言へり。

『一心』の言は、真実の信心なり。

『正念』の言は、選択摂取の本願なり。

また第一希有の行なり、金剛不壞の心なり。

『直』の言は、廻に對し迂に對するなり。
また『直』の言は、方便假門を捨てて如来大願の他
力に歸するなり、

諸仏出世の直説を顯さしめんと欲してなり。

『來』の言は、去に對し往に對するなり。
また報土に還來せしめんと欲してなり。

『我』の言は、尽十方無碍光如来なり、
不可思議光仏なり。

『能』の言は、不堪に對するなり、疑心の人なり。

『護』の言は、阿弥陀仏果成の正意を顯すなり、
また摂取不捨を形すの貌なり、
すなはちこれ現生護念なり。

『念道』の言は、他力白道を念ぜよとなり。

『慶樂』とは、

『慶』の言は印可の言なり。獲得の言なり。
『樂』の言は悦喜の言なり。歡喜踊躍なり。

先標喩法

正約趣向



B



O



S



G



R

雜行要門位

正行弘願位

有人向西

水火二河

中間白道
(東岸西岸)

水火濕燒

無人空曠

群賊惡獸

怖死向西
(未見白道位)

念言惶怖
(見一白道)

思念定死
(三定死)

尋道強決

東遣聞聲

西岸人喚

決定直進

群賊喚迴

不顧念道

到西慶樂

【合喩】

東岸西岸

群賊惡獸 (六根・五蘊・四大)

無人空曠 (無值善知識)

水火二河

中間白道 (清淨願心・善心微)

水火濕燒 (染污善心・燒功德財)

人行道上 (回諸行業向西)

東遣直進 (教法可尋)

群賊妄說 (別解別行惡見人)

西岸人喚 (弥陀願意)

乘彼願力 (信順二尊・不顧水火)

到西慶樂

【唯信仏語】

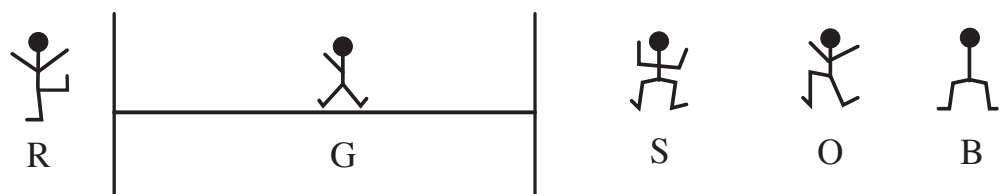
隨順仏教
隨順仏意

隨順仏願

二河譬 譬喩・合喩 対照表

帯仮義の解釈

【譬喩】



到西慶樂

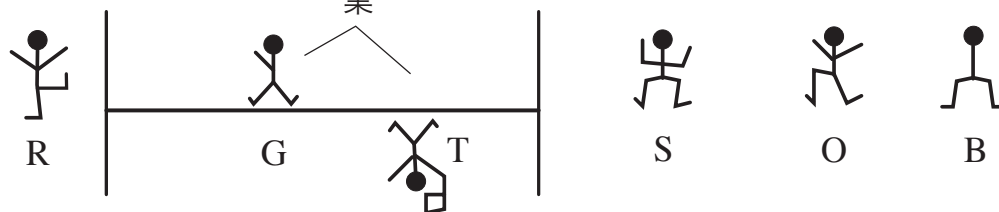
東遣聞声
西岸人喚
決定直進
群賊喚廻

水火湿焼（見一白道位）
念言惶怖・尋道強決

怖死向西（未見白道位）

無人空曠・群賊惡獸

信前信後を兼ねる
人行道上直向西廻諸行業



西岸人喚

群賊喚廻・行者退失

東遣聞声

【合喩】